

カザフスタンを旅して 民族離散の記憶 (上) ザーラ・イマーエフ 【貨物車両】強制移住の凄惨さに涙

ロシア連邦チェチェン共和国出身で亡命中の女性ジャーナリスト、ザーラ・イマーエフさんが在日韓国人の作家・姜信子さん＝熊本市在住＝と共に六月、中央アジアのカザフスタンを訪れた。旧ソ連時代に強制移住させられた人々の記憶を、ディアスポラ (民族の離散) の運命を生きる二人が追った旅の様を、イマーエフさんに報告してもらった。

チェチェンからの根無し草の亡命者としてアゼルバイジャンのバクーで暮らす私は、昨秋、人権護団体アムネスティ・インターナショナル日本の招きでチェチェン戦争の現実を語るために、自作のドキュメンタリー映画「子どもの物語にあらす」を携えて約二カ月間、日本の諸都市を巡った。そして熊本で、朝鮮半島にルーツを持つ作家の姜信子さんに出会った。

それから半年後、私たちは、カザフスタンで再会した。生きる場所は異なれど、共にディアスポラを生きる者として、二人で、カザフスタンの不毛のステップに強制移住させられた高麗人 (旧ソ連在住の朝鮮人の自称) とチェチェン人たちの記憶を追う旅に出たのである。一九三〇-四〇年代、スターリン圧政の結果、ソ連の国境地帯に暮らす十七の民族がカザフスタンへと追放された。三七年には約十八万人の高麗人がロシア極東から中央アジアへ、四四年には約五十万人のチェチェン人が北コーカサスからカザフスタンへと追放された。どの場合も、その理由は、ソ連と敵対する国家の側につくのではという"不信"。強制移住命令は突然に出て、人々はほとんど何も持つことを許されずに、貨車にモノのように積み込まれた。

中でもチェチェン人は帝政ロシアの時代から四百年にもわたり、コーカサスを侵略したロシア人と戦い続けてきた。ソ連はチェチェン人を故郷から切り離すことで、この抵抗の歴史の幕を下ろそうとした。が、その半数が死んだと言われる五十万人の強制移住の記憶はむしろ、ロシアに対し現在も続くチェチェン人の抵抗意識をより強いものにしたのだった。

カザフスタンにはいま、多くのチェチェン人が戦火を逃れて難民として暮らしている。強制移住以来、住み続けている人々もいる。私たちはそんなチェチェン人たちを訪ねて、大都会も小さな村々も訪ねた。不毛のソロンチャーク (含塩土壌) の荒野が、「特別移住者」たちの手で豊かな田園に変えられたのを見た。荒野で出会ったチェチェン人と高麗人が共に苦難を生き抜いた証、チェチェン人の食卓に並ぶチェチェン人手作りの朝鮮料理を食べることもあった。古文書館の埃だらけの黄ばんだ孤児院の尋問記録に、飢えと病にその両親たちが非業の死を遂げたチェチェン人、高麗人、ドイツ人、ユダヤ人、ウクライナ人などの孤児たちの足跡を追った。

私たちは、強制移住体験者である高麗人老女とチェチェン人老人と共に恐ろしく古びた貨物車両に乗り、実際に「全民族丸ごと強制移住」に使われた鉄路を走った。私は、四四年、五十万人のチェチェン人が経験した強制移住の凄惨な記憶に涙した。

小さな窓すら鉄条網で封じられた貨車に乗せられ、行き先も告げられず、ろくろく水も与えられなかった、二週間以上にもなる追放の旅。外は猛吹雪だというのに、車内にはコンロ一つ無かったという。大人たちはわずかな食べ物を子どもに与えた。すしづめの貨車の中で沢山の死者が出た。トイレのない貨車の中で、女の子が膀胱破裂で死んだ。死体は線路際に捨てていくしかなかった。そう語る老人の目からはとめどなく涙が流れた。

カザフスタンを旅して 民族離散の記憶（下） ザーラ・イマーエフ 【タマリスク】塩気まじりの大地に咲く花

私と姜信子さんは二週間、ともに旅をした。その間、二日間だけ、旅の根拠地としていたアルマトゥに姜さんが残り、私は、私の祖母と母の強制移住先だったカザフスタン南西部のクズィルオルダへと、ひとり空路で行くことになった。その時、姜さんは私に藍色の薔薇模様のハンカチをお守りがわりにと行って渡し、「行ってらっしゃい、そして無事に帰ってくるように！」と送り出してくれた。

私はクズィルオルダで、一九四四年に母の一族らを乗せた貨物列車が着いた人里離れた鉄道駅を訪ねた。強制移住後すぐに亡くなった私の祖母と多くのチェチェン人が葬られた荒野にも立った。墓標は作られてすぐに洪水であとかたもなく流されたのだと地元のカザフ人の老人が教えてくれた。アルマトゥに戻る道中、私は何度となく薔薇模様のハンカチで涙をぬぐった。それは一歩ごとに我が民族の悲しみの記憶をたどるものだったから。

その道中で私は、コーカサスと日本とカザフスタンという地理的な三角形のいわば頂点で私と姜さんが出会っている宿命について考えた。かつてソ連の極東から高麗人たちが、北コーカサスからチェチェン人が強制移住させられたのはほぼ同じ道程をたどって、前世紀半ばに苦渋をなめた民たちの末裔である二人の女が出会っている。私たちは悲劇よりもはるか後に生まれ、それぞれに別の試練を生きている。だが、日本生まれの「天然の美」のメロディに乗せて高麗人たちが望郷の念を歌いついできた「故国山川」という歌が姜さんの胸に響き、旅に誘い出したように、私にはステップに生える銀色のニガヨモギの渋い薫りと、カザフスタンに来るまで見たことのなかったタマリスクの薔薇色の細かい花をつけた切り株が、涙とともに胸に焼き付いた。

その花々を通じて、カザフスタンの塩気混じりの苦い大地に今も眠る何者かが、旅する私に「行ってらっしゃい、そして無事に帰ってくるように！」と語りかけてくるのだ。

再びアルマトゥに戻ったとき姜さんは、私がずっと握りしめてきたハンカチを改めて私に手渡して言った。「ずっと、貴女の手許に！」

今、バクーの仮住まいに戻った私の前には、母が座っている。彼女の震える手には、彼女の母—私の祖母—が葬られたクズィルオルダの荒野から私の持ち帰った一握りの土くれの包みが握られている。

彼女は十一歳で孤児になった。母は語った。「私は、ロシアの装甲戦闘車両に踏み荒らされた道程を辿って、はるかなチェチェンの山里の祖先たちの眠る墓所に行き、あなたがカザフスタン南部から持ち帰ったタマリスクの切り株の薔薇色の花の種子を墓の周りに植えるつもり」

タマリスクはチェチェンには自生しない。だが、そのタマリスクの花がチェチェンの山里を彩る時が来るだろう。母が語るには、そこには十三年にわたるカザフスタンでの永き追放の日々の中で、チェチェンに戻ることを夢見続けた者たちすべてへの記憶がこめられている。

そして私はといえば、藍色の薔薇模様のハンカチを握りしめながら、共に旅をした熊本の友の、温かく小さいが、極めて力強い手のひらを心に感じているのだ。

（チェチェン人ジャーナリスト）
日本語訳・岡田一男（東京シネマ新社代表）